

ノーザンび〜ふ産直協議会（宮北牧場）公開確認会 （2015年9月10日～11日）監査報告

パルシステム生活協同組合連合会新農業委員会

パルシステム神奈川ゆめコープは2015年9月10日～11日にノーザンび〜ふ産直協議会公開確認会を宮北牧場（北海道）にて開催いたしました。コア・フード牛肉の生産背景を学ぶとともに、自給飼料の活用による飼料自給率向上の取り組みを確認しました。

■コア・フードの牛肉が監査対象

2014年度にパルシステム連合会がノーザンび〜ふ産直協議会（ホクチクファーム）の公開確認会を開催し、この際は北海道産直牛が監査対象でしたが、今回は宮北牧場にてコア・フード牛肉を監査対象としました。

コア・フード牛肉は予約登録制で1頭丸ごと買い支える仕組みを導入しています。国産飼料を100%使用し、飼料に抗生物質を使用しない特徴があります。

■生産者、組合員など49名が参加しました

生産者（ノーザンび〜ふ産直協議会）7名、パルシステム神奈川ゆめコープ15名、パルシステム茨城1名、パルシステム山梨1名、生消協3名、パル・ミート7名、パルシステム連合会2名など、合計49名が参加しました。

監査人は、パルシステム神奈川ゆめコープ5名、パルシステム山梨1名、生消協1名、パル・ミート1名の合計8名が担当しました。

10日に公開確認会、産地プレゼンテーション、帳票確認、交流会を行い、11日に農場視察、監査人所見報告等を行いました。



▲公開確認会の様子

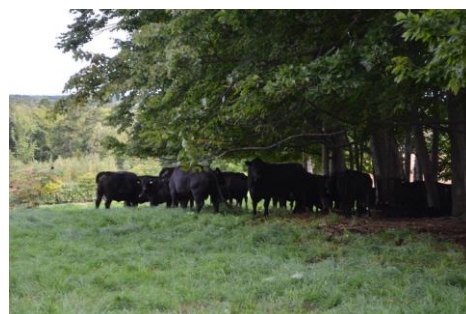
■宮北牧場について

宮北牧場は、北海道北広島市の市街地とゴルフ場に隣接する丘陵地帯に位置し、アンガス牛（コア・フード牛）の繁殖・育成・肥育における一貫生産を行っています。

飼料の自給生産も行っており、生産面積は牧草地（放牧地込み）70ha、デントコーン（飼料用トウモロコシ）圃場16haとなります。

■放牧期間を設けて牛をのびのびと飼育

宮北牧場では、子牛が生まれてからの約半年間、放牧期間（育成放牧期）を設けて牛をのびのびと育てる飼育形態をとっています。放牧期間中の子牛は母牛とともにすごし、母乳や牧草（青草）が飼料の中心となります。放牧を行うことで足腰の強い体ができ、また、肥育期にも飼料の喰いどまりのない健康的な胃袋ができます。



▲放牧地の木陰で休む母牛や子牛

■牛舎での育成・肥育

育成放牧期を終えた子牛は牛舎に移ります。育成期・肥育期にも、牧草（乾草）が与えられます。

しかし、牛舎での飼育ステージでは牧草以外の飼料も必要となります。そのため、デントコーン圃場を整地し、自家栽培を行なっています。デントコーンは収穫後に茎ごと粉碎し、サイレージ化して与えています。乳酸発酵させることで、保存性や嗜好性が上がります。



▲収穫前のデントコーン圃場で説明を受ける参加者

■食品副産物の活用

ノーザンび〜ふ産直協議会では、理念に「人間と競合しない飼料を最大限利用した牛肉の供給」を掲げています。宮北

牧場は地域の冷凍食品工場と連携し、製品とならないボイルポテトやビール粕などの食品副産物を引き取り、飼料として活用する取り組みを行っています。食品副産物は牛の飼育ステージごとに与えられる量が異なります。牛に負担が少なく、品質・価格ともバランスがよく、通年で使用できるもの選ばれています。

公開確認会では、工場から納品されたばかりの食品副産物を確認しました。宮北氏からは「工場から出された食品副産物」という説明を受けましたが、管理しやすいよう小袋に分けられ、衛生的に管理されている状態には参加者も驚いていました。



▲工場から納品されたボイルポテト

■宮北氏の今後の展望

参加した組合員からは、「これだけのこだわりと苦勞によって育てた牛肉をこの金額で購入できていることが有り難い」、「愛着をもって1頭1頭を育てていることがわかった」という意見や、「組合員として応援し続けるので飼料情勢等の苦難にも負けず、今後も取り組みを継続していただきたい」という応援の言葉が述べられました。

監査人所見報告を受けて宮北氏は、「日頃の作業を背負いながら準備を進めて行かなければならないのが産地なので、そういった苦勞を深く理解していただき、応援団として皆様に所見を述べていただいた」、「今回の公開確認会を開けたことで、営農やパルスシステムへの生産の意欲の糧になった。お互いに成長しながら、今後もこの取り組みを継続していきたい」と参加者、そしてこの場にはいない組合員に対するコメントが述べられました。



▲牛舎の様子



▲放牧中の牛を確認



▲牛舎内の様子



▲牛に与える飼料の配合についても説明を受けました

ノーザンび〜ふ産直協議会（宮北牧場） 公開確認会所見のまとめ

1. 生産者(団体)の理念や事業方針

- ・生産者主体の産直協議会を3か月に1回開催。情勢報告や生産地報告、出荷計画の確認を行っている。
- ・2名いる従業員は定期的に適切に休みが取れている。
- ・重機等の使用には細心の注意をはらい使用している。
- ・近隣の企業の協力で、ボイルポテトやビールかすなどの提供もあり、デントコーンは自家栽培をして飼料化している。

- ・ノーザンび〜ふ産直協議会の理念は「人間と競合しない飼料（牧草などの粗飼料）を最大限利用した牛肉の供給」であることを確認。
- ・未利用資源の活用を継続していく、資源循環型農業をしていくなどパルシステムの理念と合致していることを確認。
- ・供給する飼料を外国からの輸入穀物に依存する日本の畜産の現状に疑問を持ち、自給粗飼料や食品副産物など未利用資源を中心とした生産に取り組んでいる。本来は草食動物である牛の機能を活かし、人間が利用できない牧草や食品副産物を飼料として有効に活用することや、牧草から発生する堆肥を牧草地にまいたり、近隣の畑へ供給して活用する生産スタイルで、牛を中心とした資源循環・環境保全型農業を実現。

2、生産方法・出荷基準等

- ・牛本来の生理に従い、母牛や子牛について牧草地への放牧による飼育を行なっている。
- ・近隣工場より出る食品副産物・自家製飼料による国産 100%・抗生物質の含まれない飼料により飼育を行なっている。
- ・牧場で一貫生産し、繁殖・育成・肥育を経て出荷している。
- ・飼育期間が 20～30 ヶ月（一般的な乳用種去勢牛は 18 ヶ月）であることを確認。
- ・飼料への抗生物質は不使用。

3、飼養管理について

- ・投薬は獣医師の指示をもとに適切に行なっている。
- ・住宅街が近くにあるが、農場の中に入っても臭いが気にならず、牛舎に入ってやっとなのにおいを感じる程度であった。
- ・敷料はもみ殻や麦藁（ばっかん）を使い衛生管理を保つよう心掛けている。
- ・全頭共済組合に加入。母牛（お腹の子も）死亡したとき共済金として支払われる。
- ・放牧中心生産方式で、牧草や発酵飼料を与えており、糞などのにおいはほとんどない。
- ・糞や敷き藁にしみこませた尿はたい肥化し畑などに利用している。
- ・去勢、投薬は契約した特定の獣医が担当している。

4、飼料及び飼料添加物について

- ・デントコーン種子は遺伝子組み換えではない報告書、おからは原材料に非遺伝子組み換え大豆が使われており異物混入がないことの証明書とフローチャートなど、副産物についてのトレースが取れるようになっている。
- ・給餌は朝夕の 2 回。食品副産物はボイルポテトやビール粕サイレージ、おからなどを近隣の工場より取り寄せている。食ベムラがあるため毎日従業員が試行錯誤で工夫をしながら給餌している。今後も継続した副産物の入手が大きな課題となっている。
- ・デントコーンは自給栽培しており、バンカーサイロにて保管。
- ・牧草（5 種類）、デントコーン（2 種類）を自給生産している。
- ・咲くおから、ボイルポテト、ビール粕の食品副産物を与えている。
- ・おから・ビール粕はトランスバック、ボイルポテトはコンテナ、デントコーンサイレージはバンカーサイロ、牧草はラップロールストックにて保管。後から使う牧草は念入りにラップする。

5、糞尿処理およびその活用

- ・糞尿とともに敷きわら等はたい肥舎に集められ、たい肥化し、自家製飼料、放牧地へのたい肥として有効活用されていることが確認できた。
- ・尿は敷き藁に吸われる。
- ・たい肥場で粉碎して空気を抜くよう踏み固め上からシートをかけ土で覆いまとめて置くと南側の陽で自然にたい肥化させている。
- ・たい肥は放牧場やデントコーン畑へ散布し活用している。
- ・5 日ごとに敷料の交換を行っている。雨の時期は汚れやすいため交換のサイクルが早まる。

6、生産の特徴や生産者の努力

- ・食品副産物という未利用資源を飼料とし、有効利用していることを確認。
- ・飼料のうち、食品副産物以外の飼料は全て自家製であることを確認。
- ・畜産で出た排泄物等をたい肥化させ、自家飼料のたい肥として利用していたことを確認。
- ・牛本来の生理にそって、放牧され牛らしく飼育されている事を確認。下牧後もパドックを設けるなど、自然な環境を少しでも取り入れようとしている体制が見られる。
- ・と殺場へ前日搬送することで、輸送のストレスを軽減している。

- ・自家栽培飼料（デントコーン、乾牧草）、食品副産物（おから・ボイルポテト）どれも non-GMO を確認。ビール粕に含まれる GMO 対象作物（とうもろこし・大豆）については non-GMO と確認。
- ・育児放棄や双子出産による母乳が飲めない子牛に対して、与える人工乳に含まれる抗生物質はコア・フード牛では NG である。離乳後は他の牛同様抗生物質の入っていない飼料で育つ。この問題に対し、聞き取りののち、問題解決を勧めて行くことをこの場で確認した。
- ・自家でデントコーン、牧草を作り、飼料として与え、敷きわら・排泄物を肥料に変え、デントコーン、牧草地、放牧地の肥料として使うという資源循環がきちんと行われていた。
- ・食品加工工場から出る副産物を活用することで、人と家畜が食べ物を奪い合うことにならず、結果として食料自給率向上にもつながっている。
- ・自然繁殖が基本で 1 年 1 産を行っている。
- ・分娩を放牧地で行うため子牛は環境に適応、母乳と青草を自由に食べて半年を過ごす。そのことが足腰の強い骨を作り、肥育期に食いどまりのない健康的な胃袋を作る。
- ・母牛の更新は毎年 10 頭。初産と二産のみ難産になりやすいため分娩は牛舎で行っている。
- ・パルシステムに供給しているコロッケ会社へ牛肉を提供し、またそこから出た食品副産物であるじゃがいもを餌に利用するという資源循環に取り組んでいる。
- ・広々とした放牧場で牛は親子一緒ですごし、自由に歩き回り餌や水を飲む事が出来る。親子は一緒にすごし子牛は直接母乳を好きな時に飲める。放牧場の中には武（竹の）山があり牛たちはそこをくぐって体に付いたハエなどを落とすことができる。夏など暑いときに涼しく過ごせる林がある。
- ・草食動物である牛の生理機能に合致した飼養を行う事で、牛にとって最も幸せなこと（家畜福祉）とストレスを軽減して、これが最大の疾病予防になると考えている。トラブルの多い初産や 2 回目の母牛を近くでみられるように専用牛舎で管理し守っている。濡れてしまった床は肺炎にならないよう早めに替えてあげている。冬季には餌が凍らないように工夫している。飼料表示票、飼料の購入伝表・記録などで、遺伝子組み換えでない飼料と確認出来る。
- ・牛の健康を考え、嫌いなえさは好きなえさにはさみこんだり、ふりかけにして食べさせている。
- ・肥育期以外は放牧で飼育する。肥育期は牛舎が飼育の中心になる。
- ・問題が発生した時はパル・ミートで原因を調べる。ホクレン農業協同組合連合会とも連携し、個体を追える体制になっている。

7、トレース

- ・母牛自体が宮北牧場生まれであるため外部からの導入はなし。
- ・出産後 3 日以内に個体番号をつける。
- ・耳票（個体識別番号）による 10 桁管理で、と畜後は合札（枝肉番号）4 桁との併用で管理されていることを確認。
- ・組合員は牛肉生産情報システムから商品ラベルに印刷してある牛肉履歴確認番号を入力して「検索」ボタンをクリックすると、牛の個体識別情報として出生からと畜までトレースが出来る。

監査人名簿

1	パルシステム神奈川ゆめコープ	組合員	大橋 美佳代
2	パルシステム神奈川ゆめコープ	組合員	小林 圭子
3	パルシステム神奈川ゆめコープ	組合員	益田 真紀子
4	パルシステム神奈川ゆめコープ	理事	田村 由美
5	パルシステム神奈川ゆめコープ	理事	元木 朱美
6	パルシステム山梨	理事	加々見 康子
7	パルシステム生産者・消費者協議会	生産者幹事代理	薄 一郎
8	株式会社パル・ミート	取締役 商品副本部長	江川 淳

※ 監査シートの自由記載欄に記入いただいた内容を下記に掲載しました。

- ・宮北さんには、日々の仕事で大変忙しい中、この日のために準備をしていただき感謝しています。実際に視察したことで、子どもと同じように牛たちが愛情を込められて大切に育てられていることを確認できました。
- ・公開確認会を通して、規模拡大だけでなくこれからの宮北牧場のあり方に期待を持ちました。
- ・TPP の影響など課題は山積みですが、生産者とパルシステム、パル・ミート、消費者が一体となり、「食べて応援」以上に頑張っていかなければならないと思った公開確認会でした。
- ・産地の良いことばかりではなく、生産するうえでのリスク等も隠さず報告いただきました。産地の苦勞は消費者である組合員にとっても他人事ではなく、自らもコア・フード牛を支えていくために何が出来るの

かを考えるきっかけとなる確認会となった。

- 消費者と生産者がこんなにも近い関係になれる公開確認会の意義をあらためて実感した。そして同時に、次に何を考えるか、どうしていかなければならないかをパルシステムなら考えて解決してゆけると確信した。
- 公開確認会を通して、私自身が持っていた疑問も解決し、組合員のためにこれほどの努力と情熱をかたむけている生産者とお会でき、とても有意義な時間を過ごせました。

* 編集の都合で、加筆・修正している箇所があります。